

巻頭言：地域資料委員会の活動について	1
令和6年度 神奈川県図書館協会総会開催報告	2
役員名簿、委員会名簿	2
事業計画	3
予算、表彰式、表彰受賞者	4
講演会概要 「『電子図書館』再考」清田 陽司氏	5～8
連載：わたしのイチオシ 秦野市立図書館「前田夕暮記念室」	9
令和6年度 人材育成事業	10

地域資料委員会の活動について

神奈川県図書館協会 地域資料委員会委員長（二宮町図書館）

竹本 直昭

令和5年度から地域資料委員会委員長を拝命しております二宮町図書館の竹本です。

地域資料委員会は、平成27年4月に、前身であります郷土・出版委員会の名称や目的等を変更し、新たに発足しました。現在は、公共図書館、大学図書館、専門図書館から、私を含めて7名の委員で活動しています。

郷土・出版委員会は、昭和30年12月に郷土資料編集委員会として活動を始め、県内の埋もれた郷土資料を掘り起し、出版していくのがその役割でした。平成26年3月までに「神奈川県郷土資料集成」として13輯、特別篇3冊を編集、出版してきました（一部は、国立国会図書館デジタルコレクションでも閲覧できます）。

現在、地域資料委員会では、調査や研修を通じて地域資料の保存や活用についての研究を行い、さらにコロナ禍において加速したデジタル化の動きも踏まえた取組みを進めています。

令和5年度は「地域資料の現在とこれから～活用を中心に～」と題した研修会を開催しました。

県立図書館、川崎市立中原図書館、横浜国立大学附属図書館の取組みをお話いただくとともに、意見交換会を開催し、コロナ禍で途絶えがちとなっていた対面での情報交換や地域資料担当者の繋がり作りに努めました。

令和6年度においては、国立国会図書館関西館から講師をお招きして、「資料のデジタル化とデータアーカイブ構築」をテーマとした研修会を開催します（10月3日（木曜日）、県立図書館にて開催予定）。

地域資料をはじめとする貴重な資料のデジタル化は、資料保存と利活用を両立させる社会的にも価値ある取組みですが、各館それぞれに抱える事情や課題もあるでしょう。研修を通じて、取組みの推進や課題解決のきっかけに繋がればと思いますので、地域資料担当者に限らず、多くの皆さまに参加していただければ幸いです。

地域資料委員会では、地域資料について様々な観点から、館種や立場を超えて意見を交わし、活動に取り組んで参ります。これからも皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和6年度神奈川県図書館協会総会開催報告

令和6年度神奈川県図書館協会総会、表彰式、講演会が、4月24日（水曜日）に神奈川県立図書館本館4階学び交流エリアにて開催されました。

令和6年度 総会

市川秀樹会長（神奈川県立図書館）より挨拶があり、会長が議長として議事を進行しました。

審議事項は、令和5年度事業実施結果及び決算、人材育成事業、令和6年度事業計画（案）及び予算（案）、会則改正、以上4点で、これらについて審議が行われ、いずれも原案通り承認されました。

その他報告事項として、令和5年度会員の入退会状況報告、令和6年度会員の入会報告について森谷事務局長より説明がありました。これに対する質疑はありませんでした。



総会風景（撮影：事務局）

令和6年度 役員名簿（令和6年4月1日現在）

会長	市川 秀樹	（県立）
副会長	吉川 雅和	（横浜市中央）
副会長	田中 啓之	（相模女子大学附属）
理事	森 由紀裕	（県立）
理事	今部 一良	（県立川崎）
理事	小田川 紀可	（横浜市中央）
理事	小島 久和	（川崎市立中原）
理事	塚本 志穂	（逗子市立）
理事	平松 恭輔	（三浦市）
理事	松田 彰	（大和市立）
理事	有富 哲矢	（海老名市立中央）
理事	林 かをり	（伊勢原市立）

理事	山下 昌志	（二宮町）
理事	湯山 直樹	（小田原市立中央）
理事	里村 一人	（鶴見大学）
理事	森岡 緑	（横浜国立大学附属）
理事	古久保 哲朗	（横浜市立大学）
理事	丹野 勲	（神奈川大学）
理事	井上 和人	（関東学院大学）
理事	荻野 アンナ	（近代文学館）
監事	丸山 康雄	（ライトセンター）
監事	富士田 学	（福祉保健研修交流センター ウィリング横浜 情報資料室）

[事務局]

事務局長 森谷 芳浩（県立）

令和6年度 委員会名簿（◎は委員長）

<企画委員会>

◎小島 久和	（川崎市立中原）
柿澤 淳子	（県立）
久保寺 信行	（横浜市中央）
清水 順	（横浜市中央）
松田 彰	（大和市立）
竹本 直昭	（二宮町）
田中 啓之	（相模女子大学附属）
牧 幸男	（鶴見大学）
宇佐美 恒城	（近代文学館）

<広報委員会>

◎松田 彰	（大和市立）
荻野 恵理子	（県立）
石井 里枝	（県立川崎）
鈴木 菜津美	（横浜市中央）
福田 万穂	（川崎市立多摩）
長島 美幸	（大和市立）
伊東 美奈	（南足柄市立）
宍倉 明日香	（横浜市立大学）
神田 麻友子	（関東学院大学）
宇佐美 恒城	（近代文学館）

<地域資料委員会>

- ◎竹本 直昭 (二宮町)
- 河村 知佳 (県立)
- 新田 陽子 (横浜市中央)
- 秋山 智紀 (川崎市立中原)
- 木ノ戸 香子 (鎌倉市中央)
- 小山 荘太郎 (横浜国立大学附属)
- 小泉 正晴 (公文書館)

<研修委員会>

- ◎久保寺 信行 (横浜市中央)
- 奥寺 真利子 (県立)
- 荒谷 宏美 (県立川崎)
- 土岐 千尋 (横浜市中央)
- 小林 徳多朗 (川崎市立麻生)
- 中島 純子 (相模原市立橋本)
- 星 かおる (横須賀市立中央)
- 猪俣 晴香 (平塚市中央)
- 與安 元実 (藤沢市総合市民)
- 渋谷 晃 (小田原市立中央)
- 友部 仁子 (厚木市立中央)
- 瀧上 佳子 (神奈川大学)
- 阿部 真由美 (東海大学附属中央)

<大学図書館協力委員会>

- ◎牧 幸男 (鶴見大学)
- 森岡 緑 (横浜国立大学附属)
- 豊田 裕昭 (横浜市立大学)
- 堀江 美由紀 (神奈川大学)
- 百瀬 幸子 (関東学院大学)
- 黒井 由美 (相模女子大学附属)
- 種田 環 (東海大学附属中央)

- (2) 大学図書館加盟館間の情報交換と調査研究
(大学図書館協力委員会)

3 研修事業 読書推進事業

- 館員の資質の向上を図るための研修の企画
 - (1) 研修委員会の開催
- 研修活動の運営
 - (1) 見学 (国会図書館等、公共図書館、大学図書館)
 - (2) 講座 (大学図書館研修、窓口サービス、レファレンスサービス、図書館利用の促進等)
 - (3) 児童担当者向け (児童サービス等)
 - (4) 図書館総合展参加
2024年11月5日～7日 (3日間)
現地開催 会場：パシフィコ横浜
2024年11月16日～24日 (9日間)
オンライン開催
 - (5) その他
- 読書推進活動
 - (1) 子ども読書活動推進フォーラムを県立図書館と共催する。

4 広報活動事業

- 図書館活動についてPRを行う。
 - (1) 広報委員会の開催
 - (2) 「神奈川県図書館協会報」第287号～第290号を発行する。
 - (3) 協会ホームページのメンテナンス作業を実施する。
 - (4) その他協会活動についてPRを行う。
- 「神奈川の図書館2024」を刊行する。

5 表彰事業 共催・後援事業

- 永年勤続職員及び県内図書館の功労者に対して表彰を行う。
- 県内図書館事業の振興を図る上で特に有意義な事業の奨励 (共催・後援)

令和6年度 事業計画

1 協会の運営・連絡

- (1) 総会の開催
- (2) 理事会の開催
- (3) 企画委員会の開催

2 調査研究事業

- 図書館及び図書館資料に関して、次の調査研究を行う。

- (1) 県内図書館の地域資料等の調査研究
(地域資料委員会)

6 人材育成事業

- 特定の研修への参加助成金を交付する。
- 研修結果を会員へ周知する。

7 加盟館の相互協力事業

- 共通閲覧証による相互利用
(加盟大学図書館間)

令和6年度 予算

<一般会計>

収入		(円)
分担金等収入	各館分担金	1,535,000
	個人会員会費	24,000
	日図協団体活動費	110,176
繰越金	前年度繰越金	1,154,101
雑収入	雑収入	17
合計		2,823,294

支出		(円)
事務費	事務局費	225,000
事業費		
会議費	会議費	41,000
調査研究費	調査研究費	123,900
	館員等研究費	607,000
広報活動費	会報等発行費	958,000
	総合展費	314,000
表彰費	表彰費	77,000
記念事業等特別会計繰出金		200,000
予備費		277,394
合計		2,823,294

令和6年度 表彰式

表彰式では、会員施設に20年以上勤務した永年勤続職員6名、神奈川県図書館協会及び県内図書館事業に尽力し、功績のあった功労者3団体の表彰がありました。



表彰式の様子（撮影：事務局）

令和6年度 表彰受賞者

- ★永年勤続職員 6名
- 澤 あすか (横浜市南)
 - 長瀬 祐子 (横浜市南)
 - 小林 菜摘 (川崎市立宮前)
 - 菊地 陽路子 (茅ヶ崎市)
 - 千村 文彦 (慶應義塾大学理工学メディアセンター)
 - 成田 優子 (小田原短期大学)

★功労者 3団体（ ）内は推薦施設名

○ 稲田郷土史会（川崎市立多摩図書館）

昭和42年の設立から56年間、歴史・民俗・考古・地名・産物など地域のテーマを研究し、図書館や川崎市の関係機関が主催する事業への資料提供や講師の派遣など、市民の郷土愛を醸成させるさまざまな活動を積み重ねておられます。

川崎市立多摩図書館においては、子どもから大人までを対象に郷土に関する質問に答える「ふるさとなんでも相談会」（年2回）のほか、地域の歴史をわかりやすく解説する「郷土史入門講座」（年2回）を開催し、図書館事業に長年貢献いただいています。

○ 図書館おはなし会（茅ヶ崎市立図書館）

昭和58年に設立され、茅ヶ崎市立図書館本館内のおはなし室において、主に未就学児を対象とした「小さい子むけおはなし会」を開催されています。おはなし会を開催することで、多くの子どもたちや保護者が絵本を手にとって楽しむ機会を作るとともに、保護者同士の交流の場としても貢献いただいております、子どもの読書推進に寄与されています。

○ 花水木（秦野市立図書館）

平成15年に設立され、秦野市立図書館の環境美化のために、週1回程度図書館の入口の花弁台ならびに事務室に花を生ける活動を実施されています。

花があることで図書館の入口が明るくなり、活けている花に使用している花材を表示することにより、花に興味をわき、さらに図書館の利用につながることもあります。

図書館の環境づくりのために、積極的に活動をされています。

講演 『電子図書館』再考～生成 AI 時代の新たな「図書館」像を構築するヒント～

講師：清田 陽司 氏

(一般社団法人情報科学技術協会 会長)



講演会の様子（事務局撮影）

<以下概要>

30年前の1994年に出版された『電子図書館』について、生成AIが爆発的に普及しつつある2024年の文脈で読み直してみようという趣旨の話をしたい。

講師は大学の学部4年の時に、長尾先生の研究室に配属され、1年間ほど直接ご指導いただいた縁がある。長尾先生は、国立国会図書館の施策に大きく影響を与えられた方である。長尾先生の最終講義には、講師が卒論生としてアリアドネのデモをさせていただいた思い出深いシステムである。

この長尾先生が書いた『電子図書館』の表面を追うだけでなく、3つの観点から読んでみようと思う。

まず1つ目は、この実装方法の裏に隠された思想。どのような考え方（philosophy）で、電子図書館を組み立てられたのか。

2つ目は、非常に先駆的な考えがインターネット黎明期に出されていたにもかかわらず、残念ながら日本が、生成AIの普及に至る現在までにこのような先駆的な提案を生かしていない背景が何なのかを読み進めたい。

最後に、この未来の図書館像を構築していくという態度（attitude）を掘り下げていきたい。

具体的な実装方法の裏に隠されている思想を読む

1994年に出版された本書には、インターネットの本質（情報の宝庫であり、様々なアクセス方法を提供するという事）がかなり正確に書かれている。それは、技術自体は30年経ってアップデートはしているが、図書館司書が行う参考業務と本質的には同じであるということである。

マルチメディアは、「文字」だけでなく「音声」や「映像」など様々なモダリティを持っている。また、今少しづつ普及し始めているヴァーチャル・リアリティ（VR）で扱われ始めている三次元映像、あるいは触覚・味覚のような感覚も含んでいることが、94年の時点で示されている。また、マルチメディア電子教科書のイメージとして、リンクを辿るハイパーテキストの概念が示されている。

また、「図書の分類」についても言及されている。物理的な図書館は収納場所を一意に決めなくてはならないが、電子図書館では、キーワード検索で探し出すことができるため、「分類体系が主要な働きをする時代が終わった」と、かなりはっきりと書かれている。

図書や論文の情報構造についても言及されている。『岩波情報科学事典』のハイパーテキストシステムも、この考え方に基づいて組み立てられた。検索を可能にするためには、テキストだけでなく、画像をはじめとするマルチメディアの様々な情報も同じように構造化する必要がある。このようなマルチメディア性をとりいれて、構造情報を伝えながら、適切にナビゲーションをしていくという考え方が電子図書館の本質ではないかと書かれている。

また、検索対象については、抽象化レベルを考えながら、ニーズに応じた適切な対象を選んでいくという考え方が示され、電子図書館というのが検索だけで完結するものではなく、実際には執筆など、何かを創造する側面も考えていく必要があることが書かれている。

本書では、様々な必要な情報を画面に表示させて、それをみながら原稿を書いていくという図が示されているが、2000年代になってやっとこのような環境が実現した。この電子書籍や電子図書館にアクセスする時に、どのようなインターフェースでみせるかということは、基本的に抜きにして語れないということが書かれている。

長尾先生が最晩年に書かれた「情報学は哲学の最前線」『LRG: library resource guide』Vol. 27 PP. 10-76 (2019) には、『電子図書館』の裏側にある考え方が示されている。「パターン認識のための頭脳システムモデム」には、長尾先生の AI の捉え方がみえる。私たち人間というのは、五感を通じて外界情報を受け取り特徴を抽出する。そこからどうやって認識するのかは、2通りあるという。

1つは、トップダウン的な考え方である。これは古代ギリシャの哲学者プラトンの考え方で、基本的にアイデア（知識）というものがあって、人間はアイデアに照らして世界を見て、物事や何かを識別して認識するという。

もう1つは、ボトムアップの考え方。これはプラトンの弟子であるアリストテレスの考え方で、何かを分類することがベースとしてある。

物事を細かく観察しながら共通項を探して、その共通項を持つ物事をまとめて分類が成り立つ。これは AI の1つの捉え方で、たくさんさんのデータを観察し、共通項を見つけ出して、何らかの分類を作り出すというもの。

これを電子図書館にあてはめると、クラスタリングという技術を使って、似た情報同士をまとめていくことが出来、これまでにないような分類を作り出す可能性がある。

その本を表現する適切なキーワードを与えるということも、今の生成 AI の技術を使えば、かなりの精度で出来ていく。このような考え方が、『電子図書館』の思想の裏にあたるのではないかと、私は捉えている。

「情報学は哲学の最前線」では、機械翻訳という問題において、言語をどのように近似するかという考えも示されている。長尾先生は機械翻訳を研究されていて、用例による翻訳 (Example-Based MT) を 1980 年代に初めて提唱されたが、当時は非常に異端な考え方という風に言われていた。それまでの機械翻訳の研究は、基本的に文法のルールをたくさん書いて、そのルールに基づいて翻訳していく考え方が主流だった。当時、言語学者のチョムスキーの生成文法の考え方は、言葉というのは有限のルール（文法）から作り出され、その有限の文法から無限の言語集合を作り出すことが出来るというものだった。

長尾先生の考え方は、言語というのは、非常に巨大な集合だが有限であるというもの。

その考えに基づいてこの「用例による翻訳」を提案された、この考え方は、「統計的機械翻訳」に繋がり、「ニューラルネットによる機械翻訳」へと発展してきた。生成 AI にもつながる、現代の機械翻訳の仕組みの基本的な考え方を、示されていたということになる。

基本的に『電子図書館』の考え方の裏側には、私たちの言語活動は、有限のビックデータに基づいて、かなりの精度で近似できるのではないのかという考え方があったのではないかと考えている。

もう1つ「情報学は哲学の最前線」から紹介する。科学というのは、ある種の「近似」で発展してきている。

ガリレオ、ニュートンの時代の理論は、基本的に簡潔な一般理論であり、世の中の事象をできるだけシンプルなルールで表現しようというのが科学の考え方だった。その後、産業革命が起き、共通の一般理論だけでは解決できないものが沢山出てきたため、各分野固有の理論で物事を精緻に表していこうとしたのが 20 世紀まで続き、科学や工学の発展の歴史となった。

21 世紀になり、コンピューターが浸透した時代になると、第 3 次近似、つまり実世界のデータを使い、より精緻に物事を表すようになった。

これはまさに第 3 次 AI ブームと言われ、2010 年代から起きている変化と捉えることができる。長尾先生は、こういう形で物事は進んでいこうというある種の見通しがあって、『電子図書館』の考え方を示されていたと理解している。

本書による先駆的な提案を生かせなかった背景を読む

これらの考え方を提案されたのは 1994 年。世界的に見ても非常に先駆的な考え方を示されていた。ただ、日本全体でどれだけ生かすかという点で考えると、残念ながら生かしていない。このようなことになった背景を少し考えていきたい。

まず、ChatGPT について、公開は 2022 年 11 月 30 日。まだ 2 年経っていない。

ChatGPT の本質は、大規模言語モデル。アイデアを 100 個考えるというようなことが簡単にできる。見方を変えると物事を考えるときの電卓のような役割を果たしている。魔法のように見えるが、実際には明確なアルゴリズムに則って動いている。

そもそも言語モデルとは、次に出てくる単語を予測するようなモデルで、ビッグデータに基づいて予測をする。具体的に言うと、「コーパス」という言葉の集合、3000億単語ぐらいの超大規模なコーパスで計算を行う。

例えば、「私はりんご」という表現が出てきた時に、次にどのような表現や単語が現れるかということの確率を計算する。

分母をコーパス中の「私はりんご」という表現がでてくる回数、分子を「私は食べた」という並びがでてくる単語で計算する。計算できる単語数は、せいぜい3～4単語。言葉の数が多くなればなるほど、観測できる頻度は下がり、計算できなくなる。

従来の言語モデルというのは、このように単語の並びから確率を計算する考えで作っていた。

その限界を超える役割を果たしたのが、ディープラーニング。ニューラル言語モデルをディープラーニングで使えるようにするために、単語を千次元から万次元ぐらいのベクトルで表現する。

うまい具合に学習させると、似たような意味を持った単語は、似たようなベクトルになる。千次元から一万次元は、私たちの言語空間を表現するに十分な大きさと言われている。ニューラル言語モデルは翻訳から利用されてきた。

例えば「私は学生です」という入力を与えると、それぞれのベクトル(H)の中に関数がありその関数にベクトルをあげると、そのベクトルの更新が可能となり、文章を表す意味をなすベクトルが出力される。これをディープラーニングで学習させると、翻訳ができるというのがニューラル翻訳の基本的な考え方。文章が長くなってくると、1つのベクトルにその意味を全部詰め込むのは無理になる。

そこででてきたのが、トランスフォーマー(Transformer)という考え方。GPTのTは、Transformer、これは私たちが今使っている翻訳サービスの裏側になる。大量の対訳データを使ってAIを訓練して翻訳が出来る。

ChatGPTの大規模言語モデルはこれの応用。日本語をインプットして日本語を出力し、どのような質問に対して、どのような回答が出たか、というデータが沢山あれば、人間と同じような対話ができる。すべての単語はベクトルで表現されていて、ベクトルが関数の中を通過して計算されて出力されるという意味

で、ここまで紐解いていくと、魔法でもなんでもなく、プログラムということがわかる。

電子図書館というのは、究極の形をもとめていくと、ある種のAI的な存在になっていくのではないかと思う。『電子図書館』で様々なアイデアが示されているが、この多くが、生成AI技術が出てきたことで、かなり実現に近づいたということがいえる。この実現において、日本が大きな影響を及ぼしていないことを、直視する必要がある。

その原因は何か、ただ表面的な理由をとらえても意味がない。重要なのは、「態度」というところにあるのではないかと思うという話をしたい。

未来の図書館像を構築していくという態度を読む

長尾構想は、2008年に国立国会図書館長をされていた時に提唱されたモデル。当時は、非常に様々な議論をよんだ。

2022年に「個人向けデジタル化資料送信サービス」が可能になったが、この構想の形を変えた実現形態であると捉えることができると思う。長尾構想を提案するに至った考えを示すテキストがあるので紹介したい。

2019年のWEB上のインタビュー記事で、長尾先生が「普通のことを普通に考えることが実は難しい」という話をされている。世の中の固定概念に囚われ、周りの言うことを気にしてしまうのが人間であるが、そこに囚われていては、普通に考えるということは難しい。普通に考えるというのは、フラットな態度でいることが必要であるという事を仰っているのではないかと思う。

「社会全体のバランスの中で何が足りていないのか」とは、例えば多くの大学の研究者は、狭い研究分野を深く掘り下げる、それだけではなく、「社会全体のバランスの中で何が足りていないのかを考え、今の時点ではこういうことをやるのが大事だ」という発想で研究する」これが大事なのではないかということ仰っている。

これも長尾先生が電子図書館の構想を考えられたという根本的な「態度」というところだったのかと思う。

「本当に社会のために役に立つ、しかも本質的な問題を解決する。そういうテーマは何かと考える」。そこを、とにかく考えるというのは、非常に厳しいことでもあるけれども、「1週間も2週間も」「苦しみ」ながら考えることで、何か

しらみつかるとはならないかということも仰っている。「異分野の人たちとの真剣に議論する場がすごく大事」とも仰っている。大学の中ですら、異分野の人と真剣に議論する場は少ない。

長尾先生は、総合大学は、異分野の人との交流の場をもっと持つべきだと仰っていた。

60年代70年代から、医学や心理学、言語学、文学などの様々な分野の研究者と徹底的に議論され、当時、対話研究会などを毎月開催されていた。

それらのコミュニティの中から、様々な発想をされていたのかと思う。こういう「態度」が非常に大事だと思う。

また、「背景」の話に戻ると、日本がせっかくのいいシーズを生かせなかったのは、こういう「態度」の部分で1つ課題があるのかと私は捉えている。

一昨年、都道府県立図書館サミットで、これからのライブラリアンに求められる姿について、私なりに言語化した。これは長尾先生がどういう態度で物事を研究されたかというところを振り返りながらまとめたものだ。

1つ目として、「デジタル社会の大きな流れを「感覚的」に理解している」のが大事ということ。AIの仕組みは非常に複雑なので、完全に理解するのはなかなか難しいところがある。けれども、生成AIはイメージとして「こういうものである」という、大まかな感覚を持つということは、細かなところを理解するよりは簡単ではないかなと思う。

この「大きな流れを捉えて理解する、感覚的に理解する。」というのが一番大事。これは、実際に世の中でどういうものが使われているのかを体験してみることで、自分自身で初めて感覚的につかめるのではないかなと思う。

2つ目は「素直に学び続ける姿勢を持ち続けている」ということ、これは長尾先生に非常に学ぶところである。今の時代、十年後にどういう知識が求められるのか、全く予測がつかない時代になっている。今の時代の中で、素直に学び続けるという姿勢を持ち続けること自体が大事かと思う。

3つ目「多様なバックグラウンドを持った人々と協働できる」。分野によって正しさが違うことを受け入れないと、色々な衝突が起きてしまう。

お互いその違いをリスペクトしながら協働

していくということが、非常に重要ではないかと考えている。

最後に伝えたいのが、共に学ぶ仲間を持つという大切さである。一人で学べる知識は、YouTubeなどでいくらでも学べるが、そういう知識は根本的にはコモディティ化をされていて、ライブラリアンが情報の専門家として価値を提供していくうえでは、そこを超えるような学びが必要となってくる。

その学びをしていく上で、仲間をもつことが非常に大事かと思う。仲間がいることで、本質的な学びというのが、加速していく。そういう仲間を、是非もっていただきたい。対話というのが、これからの時代に求められるスキルとして非常に重要だと考えている。

(記録：山作)

清田 陽司 氏 略歴

一般社団法人情報科学技術協会 (INFOSTA; インフォスタ) 会長。博士 (情報学)。コンピュータ科学および人工知能 (AI) 周辺の研究開発にかかわる。東京大学に助教として在籍中の 2007 年に東京大学発スタートアップ (株) リッテルを共同創業し、企業買収により 2011 年から LIFULL にて不動産テック分野の研究開発にたずさわっている。2018 年から 2022 年まで (株) メディンプル 代表取締役、2022 年から (株) FiveVai 取締役を兼職。国立国会図書館リサーチ・ナビ (2009-) や Wikipedia データ解析ツール Wik-IE (2008-) などのソフトウェアの共同開発を行う。

神奈川県図書館協会 令和6年度総会講演会
『電子図書館』再考
(長尾真 著)
生成AI時代の
新たな「図書館」像を
構築するヒント

講師：清田 陽司
一般社団法人情報科学技術協会 (INFOSTA) 会長
株式会社FiveVai 取締役

開催日
令和6年
4月24日(水)
15:10~16:20
※ 昼食開始 14:00
受付 13:30

※ 講演会は録音・撮影の終了後に開催いたします。講演会に参加する場合は聴取者より引き続きご参加ください。

申込締切
4月5日(金)

<申込方法>
* 神奈川県HP 会員のページ「令和6年度 総会出席登録事項入力フォーム」
(<https://www.kanagawa-lb.jp/>)より、各加盟館ごとに4月5日(金)迄の申し込みください。※個人会員の方の出席登録事項をご入力ください。

* 加盟施設の職員及び個人会員の方は、どなたでもご参加いただけます。

講演会チラシ

連載 わたしのイチオシ

秦野市立図書館「前田夕暮記念室—短歌のふるさとづくりを目指して」

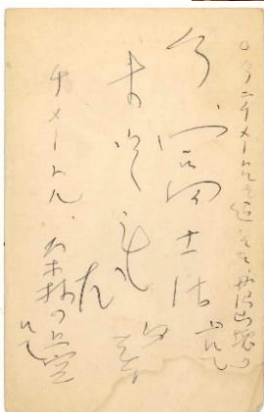
当館には、秦野生まれで大正期から昭和にかけて活躍した歌人・前田夕暮（1883-1951）のほか、歌人・国文学者として活躍した谷鼎（1896-1960）の著作や直筆資料を展示する記念室を併設しています。

昨年は前田夕暮の生誕から 140 年となる年であったことから、記念事業として夕暮について紹介する講座や、特別展示などを開催しました。

昨年の展示に際して発見した資料の中から、「イチオシ」の資料をご紹介します。



前田夕暮記念室入口



前田夕暮が弟子に送ったはがき

夕暮は、昭和 4 年に朝日新聞社が主催した、歌人たちを飛行機に乗せ、その感想を短歌に詠ませる「空中競詠」というイベントに斎藤茂吉らとともに参加しました。共に参加した歌人たちの記述によれば、このはがきは、夕暮が飛行機に持ち込んで書いて弟子に送ったと考えられます。この飛行体験ののち、夕暮は「自然がずんずん体の中を通過する一山、山、山」に代表される、自由律短歌へと本格的に踏み出していきました。

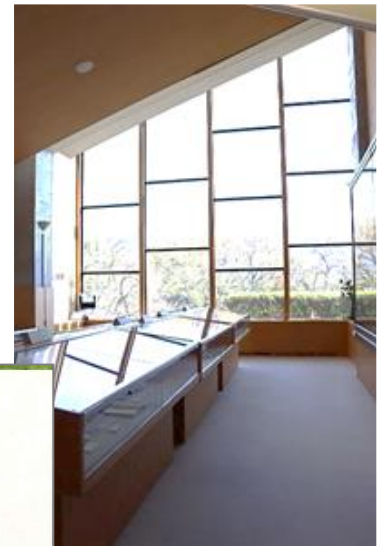
夕暮自身は若い頃に上京し、秦野の地に居を構えることはありませんでしたが、ふるさとについて次のような言葉を残しています。

私は幸ひにして郷土をもつてゐる。私は草木
土壌の香氣のなかに、山野村落の間に生れた。
これは私にとって今にして思へば何物にもかへ
がたき賚である—

（大正 15 年刊『烟れる田園』）

また、春には全国から短歌を募集する「夕暮祭短歌記念大会」、秋には市内在住・在学の小中学生を対象とした「夕暮記念こども短歌大会」を例年開催するほか、市内に設置された歌碑をめぐるマップをご用意するなど、短歌のふるさとづくりを進めています。

ぜひ皆様からのご応募、そして記念室へのご来館をお待ちしております。



記念室内の様子



前田夕暮記念室
歌碑めぐりマップ
パンフレット

（秦野市立図書館 牧野友香）

神奈川県図書館協会 令和6年度 人材育成事業

神奈川県図書館協会では、2018年に迎えた創立90周年時に、記念事業の一環として人材育成事業を企画し、5か年計画で実施しました。(2019～2023年度)

昨年度、事業の最終年を迎えるにあたって検討した結果、4年程度継続して実施するとの結論に至ったため、2024年度も募集を行います。ぜひご活用ください。

この事業では、外部団体の研修へ参加する機会を増やし、会員の資質向上を図り、神奈川県全体の図書館司書の力量を高めることを目的に、会員のみなさまを対象に、2024年度～2028年度までの4年間、あらかじめ定められた研修に参加する際の経費を全額または一部助成します。

【令和6年度助成対象研修】

対象研修 ※（ ）内は開催地	開催日	開催者の参加申込締切	募集人数
① 専門図書館協議会全国研究集会 (未定)	7月中旬(2日間)	未定	2名
② 全国図書館大会(長崎県) ※オンライン形式、一部対面	11/30(土)～12/1(日) (2日間)	9月下旬	2名
③ 大学図書館職員短期研修(京都府)	10/22(火)～10/25(金) (4日間)	7月19日	受講 決定者
④ 中堅職員ステップアップ研修〔1〕 ※オンライン形式	10月下旬(6日間)	8月	1名
⑤ 全国公共図書館研究集会 <サービス、総合・経営部門>(高知県)	11月上旬(2日間)	未定	2名
⑥ 図書館司書専門講座(東京)	令和7年6月(10日間)	令和7年 5月上旬	1名
⑦ 児童図書館員養成専門講座(東京)	前期 令和7年6月(6日間) 後期 令和7年9～10月(9日間)	令和7年 4月上旬	受講 決定者

※ 対象研修③⑦は、書類審査等で受講が決定した人を、助成対象とします。(人数制限なし)

【助成対象者】

助成申請時から報告書提出時まで、神奈川県図書館協会加盟館に勤務する職員であること。

※前年度に助成が決定するものについて、異動等により受講時に助成対象資格がなくなった場合は助成を取り消すものとします。

【募集時期】

令和6年6月～各対象研修の参加申込締切2週間前

※先着順ではありません。応募者が募集人数を上回った場合は、理事会において審議選定します。

要項の詳細等、詳しくは協会ホームページに掲載いたします。

～多くのみなさまのご応募をお待ちしています！～